

「20000ヘルツ」

登場人物

律子
先生
ユミ

作

サカイリユリカ

閑散とした、殺風景な部屋。

白い壁が取り囲むその小部屋には、アツプライト型の黒いピアノが一台。そして、手前には背もたれのない四角いイスが置かれている。

ピアノの蓋は空いており、五線譜だけが描かれた楽譜が、開かれている。うなだれた中年の女性が手前のイスに腰掛けてピアノと対峙している。

律子　こんなに、空っぽになるなんてね
・・・

一本の指が、ミ、ソ、ラ、と探るように鍵盤を叩く。

律子　私は、どうしたら、良かったのよ

「レ」の音の鍵盤を、音を確かめるように何度か叩く。

律子　ねえ、ねえ、

一本の指が、ド、ソシラ、と探るように鍵盤を叩く。

律子　また、ひとりになっちゃったのね・・・律子・・・

両手の指が、ピアノの鍵盤をなぞる。

律子　あなたはいつだって、私を慰めてくれた。
なのに今は、

突如、沈黙を破るかのように、女性は両腕を振り上げ、握りこぶしを鍵盤の上に強く振り下ろす。「ジャン」という不協和音。

律子　・・・あなたの声が聴きたい。

会えるのなら、もう1度会いたい・・・

・・・わたし・・・

もう1度・・・あなたの心を震えさせることが、

わたしに出来るのかしら・・・

背の高い男性（先生）が、メトロノームを持って部屋に入ってくる。

先生はメトロノームをピアノの上に置き、針を動かし始める。

部屋には乾いたメトロノームの音が響く。

先生　ピアノという楽器は、黒鍵が36、白鍵が52、合わせて88鍵あります。

それから、下についている3つのペダル、これは右から、ダンパーペダル、マフラーペダル、ソフトペダル。手ばかりで演奏しているのが最初は精一杯でしょうが、足でも演奏できるようになれば、更に音に深みや伸びが増し、表現の幅が広がるというものです。

律子　先生・・・先生にピアノを教わっているところは、まさか自分が教える立場になるだなんて、思ってもみませんでした。

先生 …… 律子さん、どうやらあなたは何か疲れているようだ。
少し休憩しましょう。
先生、でも私…
ねえ律子さん。知っていますか。
自然界には1ヘルツから数百万ヘルツまでの音が存在していますが、そのなかで人間は20ヘルツから20000ヘルツまでの限られた振動しか、音として感じ取ることができません。

でもね、耳では聞こえなくても、身体で空気の震えとして感じることは充分にありうることなのですよ。

律子 先生、わたし、先生のある演奏を聞いて、ひどく感動したのを覚えています。お寺の隣にある、小さな木造のホールでしたけれども、その綺麗なメロディが優しく響いて、ずっとその余韻が、身体に残っていました。

先生 …… そうでしたか。あなたの心に届きましたか…
…あの寺の隣にあるホールでね… そうでしたか…

律子 先生？

先生 …… 律子さん。恋をしたことがありますか。

律子 …… なんです、突然

先生 僕はあります。そのひとで、頭の中も、耳の中も、身体の中もいっぱいではち切れそうになって、大変に苦しいのです。ですが、そのひとでいっぱいになるとき、僕は生まれて初めて曲を産み出せました。

律子 …… 先生、私も、今あるひとのことで、身体の中がはち切れそうに、痛いのです。

若い女性(ユミ)が、部屋に入ってくる。

ユミ 私は律子さんが好きです。

律子 え？ああ、ありがとう

ユミ 律子さん。そういう意味じゃありません。

律子 え？

ユミ、律子に突如口づける。

律子 (ユミからとっさに離れ) あなた、なんてこと本気ですよ。

ユミ 冗談おっしゃい。おばさんをからかうのもたいがい…

律子 冗談なんかでこんなことしませんし、できません。

間。

律子 あのね、私はユミちゃんずっと年上で、下手したらお母さんと同じ年、とまではいかないけどそれに近いものもあるかもしれないに…

ユミ そんなことどうだっていいです。関係ない。
律子 どうしたいの、あなたは…？

ユミ 仮に私のことが本当に好きだとして、
律子さん。私ね、人の喋り声、嫌いなんです。

なんでかっつていうと、私、親にね、ずっと罵られて育ったんですよ。父と母が仲良くなかったのもあるけれど、私も成績が悪かったし、のろまだし、イライラさせてたんでしょね。だから怒鳴られるなんてしょっちゅうでしたよ。でもね、人間って不思議で、怒鳴られるのも毎日だと、慣れて、そのうち何も感じなくなるんです。

ただね、限界、つてあるみたいで、私ある日、駅のホームで誰かが怒鳴られてるの聞いたら、急に体がガタガタ震えだして、叫び声あげて倒れちゃったんですよ。

・・・どうかしてますよね。

その日から、人の声、ことば、を受け付けなくなっちゃって。すべて騒音に聞こえて、うるさくてうるさくて、気が狂いそうだった・・・。

ユミちゃん、

でもね、先生、そんな、ふさぎ込んでいた私でも、

「おと」ならゆるせたんです。

どういうこと・・・？

それまではね、私、海外のロックとかアップテンポのJPOPとか、好んで聞いてましたけど、それすらもうるさくなっちゃってしまっただけ。

そんなときに、どこからかピアノの優しい音色が、聞こえてきたんです・・・。

不思議でした・・・。ささくれだった神経を包み込むように、すーっと音が私の中に入ってきて。なんだろう、こう言っちゃうと大げさだけど、

ああ、私、生きててもいいんだな・・・、つて・・・
そう思えるようになったんです。

そうなの・・・そんなことが・・・でも、だから、じゃあ、ピアノを・・・？
まあ、一つのきっかけに過ぎませんけど

・・・そう・・・

沈黙。

ユミ ごめんなさい、急に変なこと話しちゃって。

律子 いえ、いいのよ。少しも変なことなんかじゃあないわ。

ユミ 律子さん

律子 え？

ユミ 律子さんのピアノの音色、そのとき聴いた優しい音色にそっくりなんです。

ああ、もうこれは運命だなって・・・

初めて律子さんの演奏する曲を聞いて、そう思いました

そんな、冗談止して・・・

ユミ 律子さん。私、一応口説いてるんですけど。

え？じゃあその音色の話は作り話・・・

ユミ それは、律子さんが私に返事をくれたら、教えてあげます。

ユミ、 部屋を出ていこうとする。

律子、 突如「エリーゼのために」を弾きだす。

ユミ、 立ち止まって律子の方を振り返る。

ユミ いいですよ、この曲

律子 練習曲としてはちようどいいわね

ユミ 「違うの、そうじゃなくてね、この曲って、ベートーヴェンが1人の女性の為に作った曲でしょう？」

律子 「そうだと言われてるけれど」

ユミ 「なんか、いいなって。そういうの。幸せじゃないですか？」

律子 「どうかしらね、曲を押し付けた方の片思いだったら、迷惑極まりないんじゃないかしら」

ユミ 「迷惑、ですか」

律子 「え？」

ユミ 「ううん、なんでもない。あーあ、あたしもいつか、こんな風に誰かがあたしの為

だけに曲、作ってくれたら幸せなんだろうなあ

律子 「なに言ってるの、ほら。練習つづけるわよ。」

ほら、また頭から弾いてみて。

ユミ 「はい。(おどけて) じゃ、

「律子さんのために」

律子 「馬鹿言わないの」

。律子、立ち上がってユミにピアノの席を譲ろうとするが、ユミは座らず、部屋を出ていく

律子

不思議だった。

でも、皮肉なことに、それが最後に聞いた、ユミちゃんの音でした。

続く